よみがえる日本一のかやぶき屋根

～正法寺改修工事終了～

平成6年度から始まった〝日本一のかやぶき屋根　正法寺〟の改修工事は、8月いっぱいでそのすべてを終了しました。

今回の工事は、寛政11年（1799）年の火災の復興以来、約200年ぶりの大掛かりな保存修理工事でした。

本市が誇る国の重要文化財・正法寺。11年8カ月の歳月をかけた〝平成の大改修〟についてご紹介します。

平成の大改修

改修に至るまでの経緯

正法寺は、昭和30年代に境内主要建物の改修工事が行われましたが、時が経った50年代になると、本堂、庫裏ほかの建物の傷みが目立つようになりました。特に本堂は、かやぶき屋根の傷みが進み雨漏りが生じる一方、軒先が北東隅を中心に大きく垂れ下がり危険な状態でした。また、建物が背面側（北側）に傾き、礎石（基礎石）の割れや移動が随所に見られ、部屋の床面が建物の変形に伴って湾曲していました。

59年、成田芳髄氏が第55世住職に着任したことを契機に境内建物の整備計画が始まり、翌60年には各末寺からなる「正法寺発展興隆奉賛会」が結成されました。当時、境内建物の維持経費の面から本堂の屋根をこれまでのかやぶきから銅板ぶきに変更するといった議論が持ち上がっていました。

本堂をはじめとする建物の改修計画を打診された水沢市教育委員会（当時）は、各境内建物の文化財的価値を確認するため、60年3月にその予備調査を東北大学工学部・佐藤巧教授（当時）に依頼しました。調査結果を受けた正法寺は、同年6月に「本堂屋根修理の銅板葺計画」の見直しを行い、これまで通りかやぶきで行うことを決定しました。

その後、水沢市教育委員会は境内建物、古文書、宝物などを対象とした総合調査の実施を前記佐藤教授、岩手県立博物館・大矢邦宣主任専門学芸調査員（当時）などに依頼しました。この調査は60年度、61年度に実施され、報告書が刊行されています。

国の重要文化財指定に

このように60年から計画された建物の改修工事は、各建物の文化財的価値の確認にとどまらず、幸いにも正法寺全体の諸史料の発掘、確認の作業にもつながり、その後の文化財指定に結び付く結果となりました。建造物はこの総合調査の間に、本堂、庫裏、惣門、開山堂、鐘楼堂がまず水沢市指定文化財（60年）、62年の本堂、惣門の岩手県指定を経て、平成2年には本堂、庫裏、惣門、鐘楼堂（附指定）が国指定となり、〝平成の大改修〟実施に至りました。